

「なぜか仕事ができる人」が必ず実践している「習慣」とは？

仕事も人生も後悔したくない人へ

PHP Business

THE 21

巻頭特別インタビュー

稲盛和夫

京セラ名誉会長

困難に
直面したときこそ
「原点」に立ち返ろう



文野直樹
イトアンド社長



鈴木貴子
エステー社長

各界のプロ22人の
「仕事の習慣」

平成29年4月10日発行 毎月1回10日発行 第34巻第5号 昭和60年1月22日第三種郵便物認可

総力特集

一挙公開!

なぜか 仕事ができる人の 習慣

「一流」は見えないところで何をやっているのか

『最強の働き方』ムーギー・キムが明かす
世界のエリートが大切にしている
習慣とは？

三日坊主には理由があった
今度こそ続けられる！
「習慣化」のテクニック

特別インタビュー

心屋仁之助

「続けられない」
自分を変える秘訣



特別企画

40代から始める新・健康習慣

05

ざ・にじゅういち

2017

No.390
PHP INSTITUTE

定価630円

つねに「自然体」の 接し方が 相手に信頼感を与える

人材のプロ
の習慣



株プロフェッショナルバンク 小杉隆英

Takahide Kosugi

1973年生まれ。97年、(株)パソナ入社。首都圏および全国の支店長職などを経て2010年に退職。個人が活躍でき、さらに営業力を磨けるヘッドハンティングの仕事に興味を持ち、パソナでの上司数名が創業したプロフェッショナルバンクに入社。ITやメーカーなど幅広い業界を担当し、社内売上げナンバーワンのヘッドハンターとして活躍している。

「キャラを立てない」
ことで本音を引き出す

転職という二十代が中心と思われがちだが、最近では三十三〜四十代の転職が増えているという。この世代のいわゆる「プロフェッショナル人材」のヘッドハンティングを手がける小杉氏が、スマートな印象とは異なり、実際の仕事内容はとても泥臭いものだという。

「我々のクライアント企業の求める人材は専門的な業務に携わるケースが多く、そう簡単には見つかりません。たとえばある分野に特化した技術者が欲しいとなれば、その分野の特許の出願者の一つひとつ調べていくといった地道な作業も必要です。もちろん独自のノウハウはありますが、転職サイトのようにウェブ上でマッチングするだけ、というわけにはいきません。」

候補者を見つけた後も、直接その会社に電話をするわけにはいきませんから、多くの場合は手紙やメールを送ります。それでも全員が会ってくれるわけではありませぬし、仮に面会まで持ち込めたとしても、八割の人には警戒されていますね(笑)「だからこそ、小杉氏が心がけ

ている習慣がある。「誰に対しても自然体で接する」ことだ。

「何より、まずは相手の警戒を解かなくてはなりません。そのためには、自然体で接することが重要だと思うからです。」

だから私は初対面の際、自身自身のことを話すことが多いです。自分自身の話なら自然体でできますし、それが相手の緊張感を解くことにもなります。

また、自然な笑顔や表情をいかに作るかも重要。どんな表情が自然なのか、自分でも意識するようにしています」

同時に「自分のキャラを立てない」ことも意識している。

「転職を成功させるためには、相手が本音で話してくれるかどうか重要。自分が前に出てしまつては、本音を話してくれません。もちろん、『ここぞ』というタイミングではこちらから動きます。たとえば先日、休日に突然、秋田にいる候補者から電話があり、その日すぐに秋田まで飛んでお話をしました。それでも、あくまで基本は『転職をお願いする』というより『相談に乗る』というスタンスです」

小杉氏は一日平均五人と会うという。年間一千人以上、累計では数千人に及ぶ。「人脈」を

維持する習慣はあるのだろうか。

「特別なことはしていませんが、SNSなどでゆるくつながるようにはしています。人脈は生き物のようなもので、あるタイミングではご縁がなかった人に、数年後にぴったりの話が舞い込んだりすることがあるからです。」

また、SNSでつながっている人に関しては、なるべく近況をチェックするようにしています。たとえば、その人が最新の学会に出たと日記に書いてあれば、自分もその情報をチェックします。私がおつきあいしている人は『その道のプロ』が多いので、彼らの動向は他のメディアでは得られない貴重な情報源になるのです」

転職はまだ日本ではハードルが高く感じられる。そんな人に小杉氏はこうアドバイスする。

「一つの会社でも複数の部門や仕事を経験しキャリアアップできるのと同様に、日本全体を一つの会社と考えれば、自分自身にとって本当の『適材適所』は今の会社だけではないかもしれません。可能性はさらに広がります。バブル崩壊後の時代にもまれてきたこの世代の人材へのニーズは高いです。もっと自信を持って挑戦してもいいと思いますよ」